



# 2017年度 天文資料

平成29年度 第8号 (11月号)

平成29年10月25日

発行：佐世保市少年科学館

佐世保市少年科学館



## <11月は多くの流星群が出現>

11月に出現するしし座流星群、1833年には北米で「雨のような大出現」が起き、日本でも2001年に1時間あたり1000個ほどの流星が見られました。また、11月にはおし座流星群も出現が予想されます。今回は、この2つの流星群を取り上げ、極大日※1、その日の条件※2、母天体※3について紹介します。

※1: 流星が最も多く出現すると予想される日。 ※2: 主に月が出ているかいないかなど。

※3: 流星群を起こすものとなる彗星などの天体。彗星が通った後には大量のチリが残り、そこを地球が通過すると、チリが大気圏に突入して多くの流星が出現する。



2001年のしし座流星群  
(提供:国立天文台)

## <おし座流星群>

おし座流星群は、南流星群と北流星群の2つがあります。南流星群の極大は、今年は11月5日と予想されています。満月過ぎの月が出るため、条件としてはあまりよくありません。北流星群の極大は、11月12日の予想です。この日は下弦過ぎの月となるため、真夜中過ぎまでよい条件となります。ともに流星の数は多くありませんが、明るい火球が見られることもありますので、見逃さない流星群です。南・北流星群ともに、ピークがはっきりしているわけではなく、予想される極大の日はいくつもあるかもしれません。



おし座南流星群の火球  
(提供:国立天文台)



ピエール・メシヤン



ヨハン・フランツ・エンケ

おし座流星群の母天体は、南・北ともに「エンケ彗星」です。この彗星は、1786年フランスの天文学者ピエール・メシヤンが発見しました。その後、何度か確認がなされましたが、1822年にドイツの天文学者ヨハン・フランツ・エンケの軌道計算により、これらの彗星が、同じものであることが証明され、エンケ彗星と呼ばれるようになりました。エンケ彗星は、太陽を回る周期がわずか3.3年で、現在知られている天体の中では最も短い周期です。

## <しし座流星群>

しし座流星群は、2001年に大出現が見られました。今年の極大日は11月18日になりそうです。母天体は、テンペル・タットル彗星、この彗星は、1865年から66年にかけて、ドイツの天文学者エルンスト・テンペルとアメリカの天文学者ホレス・タットルによって発見されました。太陽のまわりを33.2年周期で公転しています。最近太陽に近づいたのは1998年で、3年後の2001年には大量の流星群が出現しました。今は、出現数が減っていますが、明るい火球も期待されるため、見逃さない流星群です。なお、テンペル・タットル彗星が次に太陽に近づいたのが2031年で、この2~3年後には大量出現が期待できます。



エルンスト・テンペル



ホレス・タットル

## <夜明け前に東の空で木星と金星が並ぶ>

11月13日(月)、明け方東の空で、金星と木星が大接近、金星のすぐ下に木星が並びます。ただし、日の出20分前の6時30分ごろでも、金星の高度は約9°と低く、東に高い山があると見えません。また、この時間には、空も明るくなっているために、光度-3.9等級の金星でも、肉眼で見えるかどうかわかりません。山の上など東の空が開けたところで、双眼鏡を使うのがいいでしょう。なお、翌日の14日には、金星と木星の位置が入れ替わり、木星が上になります。

